

## 中国伝統農具調査の回顧と展望

渡部 武<sup>※</sup>

今年（2012年）も多くの海外の友人たちから年賀状が寄せられた。このごろはe-mailの普及によって封書での年賀状は少なくなった。パリ在住の社会科学高等研究院のヴェアシュアー教授（Charlotte von Verschure）は数少ない封書堅持主義者であったが、今回はめずらしくe-mailで年頭の挨拶と近況を知らせてきた。それには雲南省西双版纳タイ族自治州で撮影した農村風景写真が添付されてあった。暮から正月にかけて雲南大学の尹紹亭教授のもとで伝統農具の研究を行ない、この機会を利用して西双版纳景洪周辺のタイ族の農村めぐりをしたとのことであった。そして次のようなことも日本語で記されてあった。「渡部さんの調査された曼竜村にも行きました。あらためて渡部さんのお仕事に感激いたしました。これだけの短い間に、これだけ多数箇所まで詳細な調査と記録をなさることは、類例がないと思います。たいへん貴重な本です<sup>(註1)</sup>。そしてこれは中国人だけでなく、人類にとっての貴重なmemoryになります。」

雲南地方諸民族の伝統的生産工具については、1990年代以降に私は尹紹亭氏やクリスチャン・ダニエルス氏（現東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）とチームを組んで、移動しながら資料収集と記録に専念したことがある。この調査には旧知の民具研究のエキスパート（田村善次郎、印南敏秀、神野善治、朝岡康二の諸氏）も加わってくれたこともあって、調査を一段落させるたびに充実した報告書を公刊することができた。われわれが調査テーマを伝統的な衣食住などの生活様式や生産工具に絞ったのは、90年代の中国の情勢下では宗教や社会組織などの調査は困難であり、また文革終了後の政府の政策方針が改革開放経済へと大きく転換を図ったこととも関係が深い。

当時、中国政府は沿海部に経済特区を設け、旧市街地は急速に再開発され、そして全国に高速道路網が着々と建設されつつあった。これらの開発のための労働力の多くは僻遠の農村や山村から調達された。この未曾有の中国社会の変貌は、あたかも1960年代に高度経済成長期を迎えた日本の社会状況を彷彿とさせた。わが国では、この時期の工業化社会への脱皮により家電製品が普及し、人々の生活様式に大きな変化をもたらされた。伝統的な生活用具が大量に放出あるいは破棄され、識者のあいだで民具の保存が真剣に議論されだしたのもこの時期からである。私とダニエルス氏は中国でも同様の現象が起こるはずと確信し、開発の後発地帯である西南中国地方に着目したのである。

われわれの調査は資金的には充分ではなかった。経費節減のため、寝袋持参、現地の民家宿

---

※ 東海大学名誉教授

泊を原則とした。おかげでずいぶんとナンキンムシとシラミには苦しめられた。それでも十年余にわたって雲南省、四川省、および重慶直轄市の領域を、まるでアリが大地をはい回るように記録する旅を続けることができた。その結果、所期の目的どおり多くの伝統的生産工具のデータを残すことができた。しかし、調査を進めている最中において、調査地各地の水力で稼動するサトウキビ搾り機や製粉用水車は次々と姿を消していった。ヴェアシュアー教授が言われるように、われわれの記録は調査するそばから「貴重なmemory」と化していったのである。中国農業史研究の泰斗である浙江農業大学（現在は浙江大学に合併）の游修齡教授は「実物の農具が失われても、報告書中にその実測図があるので復元は可能である」との書信を送ってこられた。

たしかに民具の記録には、写真のほかにも実測図があることが望ましい。しかし、それ以上に重要なことは民具の実物を残すことである。なぜならば写真も実測図も図像学的観点から言うならば、これらはいずれも一種の解釈にすぎず、実物の内包する情報量にはるかに及ばないからである。以前、国立民族学博物館の共同研究に参加していた時に、佐々木高明館長が「博物館はたった一回観ただけでは不十分です。同じ展示物でも毎回観ることによって必ず新しい発見があるものです」と語っておられた。たぶん佐々木館長はモノの背後にある人間の営みや、その造形に反映された技術や文化のパターンなど、観る者の問題意識によって汲めども尽きぬ情報が得られることを言いたかったのであろう。私は佐々木氏の見解に賛成である。ところが、西南中国での調査経験を中国のある大学で講演し、そのような伝統的生産用具の収集の必要性を説いたところ、報告後、私は一人の院生から「見慣れた犁などの伝統的農具を収集・記録することに、一体どのような意味があるのですか？」という内容の質問を受けた。

このような知識青年から発せられた疑問は至極もったもなことである。それに対して比較文明論的な観点や、挽畜の馴致方法や繫駕法などの技術論、はたまた耕作方法や農法などを振りかざして縷々と説明したならば、マルク・ブロックがフランスの中世農村社会を解き明かした書物の中国版ができることになる。率直に言って、私は自分の調査データが第三者、とくに中国の人々に活用され、それが呼び水となって同様の調査が中国各地で実施されることを渴望した。

改革開放経済政策が軌道に乗り、中国国民のGNPが急速に上昇するにしたがい、人々がかつての自分たちの生活を振り返る余裕が出てきた。それは旅游ブームに端を発して、各地方の伝統的な街並み（いわゆる「古鎮」）に新たな観光価値が見出され、その一隅にかかわらず生活文化展示館が設けられるようになった。ただしその大半は民具をただ並べるだけで、説明は著しく不親切である。

しかし、注目すべき動きもあった。それは山東工芸美術学院の潘魯生氏を中心とした「民芸」研究活動である。彼らの言うところの「民芸」は柳宗悦らが慣用した「民芸」とはかなり趣を異にしており、むしろわれわれが馴染んできた「民具」の概念に近い。彼は文革末期からこの方面に関心を抱き、1990年代末から学生たちを動員して本格的な山東地方におけるフィールドワ

ークを実施し、その成果を民間文化生態調査叢書（全6冊、山東美術出版社、2005年。その内訳は『錦繡衣裳』『以食为天』『民居宅院』『車行舟進』『農事器用』『民芸調査』）としてまとめ公刊した。そして収集した民具を各地で巡覧展示する一方、当地方における伝統的な手工芸、たとえば臨沂地方の柳編み細工、紅花郷の吉祥結び工芸、莒南の石彫刻、荷沢地方の民画・桐材工芸・土布、および楊家埠の凧・年画などについて、生産者、中間業者、卸売り、販路などを詳細に調べ上げ、将来に向けての提言を行なっている<sup>(注2)</sup>。このような民具の研究のあり方は、研究の成果を現場の人々にフィードバックしている点で大いに評価できる。

それから伝統的な民具の活用方法で、これこそ中国特有であると感心させられた活動事例がある。2008年の春頃、研究室出入りの中国書籍取り扱い業者が「最近このような農具関係の図録が刊行されたようです」と一枚のリーフレットを持参した。そこに紹介されていた書物のタイトルは『耒耜集粹』（南方出版社、海南省海口市、2007年刊）と称し、一軍人が苦勞して集めた農具を中心とした生活用具の図録集であった。早速一冊予約してみたところ、私の手元に届いたのは一年後のことであった。

本書には賀恒徳將軍が郷里の同族や友人とともに、大小の伝統農具や民具を苦勞して収集し、「中原民俗文化園」という公共施設を創り上げる過程と収集民具が鮮明なカラー写真で紹介されてあった。この文化園のユニークな点は、生活用具の展示ばかりでなく、農民の娯楽に供するための図書館、閲覧室、囲碁・将棋などを楽しむ娯楽室、芝居を上演するための戯台、釣堀が設けられていることである。とりわけその運営にあたっては、中国特有の血縁集団「宗族」が当たっているのが注目され、園内中庭にはそのことを記した「賀氏銘箴」（翻訳すると「賀氏誓約碑」とでもなろうか）なる碑文が立てられてある。この碑文を読むと文化園の縁起がよく分かるので、以下参考までに訳出しておこう（カギ括弧内は渡部補）。

### 賀 氏 銘 箴

私は解放戦争時代に生まれた。祖先たちは代々農業に従事し、暮らし向きは貧しかったが、郷里の〔河南省〕鄆城県大賀荘は、その土地柄および人情は純朴であった。父母は読み書きができなかったにもかかわらず、善良で世間に通じていた。私は幼い頃よりその感化を蒙り、両親から受けた恩恵はまことに深い。1964年、私は従軍し幾度も戦場で練磨され、ついには一兵卒から將軍の地位にまで榮達した。さて、この身を天涯においてみると、心にかかるのは郷里のことばかりであった。そこで以下のことを決心した。退役前に家人を動員し、親戚・友人に支援を仰ぎ、同郷の人々に委託し、広く中原地方の農具および生活用具を収集し、一カ所に集積して“中原民俗文化園”なる施設を創ることにした。その意義は三つある。第一は、民俗文化遺産を保護すること。第二は、この展示を通して後の世代の人々に中華民族の生産力と中原文明の発展過程を理解してもらうこと。そして第三は、同郷の人々の公益のために長久の福利を図ることである。これら三つの願いが後の世代の人々に伝えられれば、それで私は満足である。

この中原民俗文化園を維持管理するために、厳正に以下の規約を定め、もって子孫の族人と

園主にとっての誓約としたい。(一) この園の所有権は国家と集団の所有に属し、後代の子孫たちはただ一定の力添えをするだけにとどめ、決して売却したり抵当に入れたりしてはならない。個人所有にしたり分割したりすると荒廃を免れないからである。(二) この園は公益の場所であり、同郷の人々の観覧と娯楽に供されており、園は園の役割を果たすだけで、営利を目的とするものではない。(三) 園の管理には賀恒徳・賀継偉・賀冠雲などの〔宗族〕祭祀を継承すべき子孫の長子が世襲で行うものとする。もし長子にその管理能力がなければ、その妻が族人に委託するか、または国家に委譲してもかまわない。望むらくは、後代の子孫たちは私のこの誓約に従い、切望するところに背くことのないように。

創立人 賀恒徳

甲申の年の冬 (2004年9月29日)

このような民具の保護・展示方法はわが国では、たぶん類例が見られないのではないかと思われる。その昔、魯の国出身の孔子は弟子を引き連れ諸国を遊説して回り、晩年に故国に戻り没するが、彼の使用した馬車は長らく孔子廟に安置され、百年以上も後の孟子の時代まで保管されていたといわれる。それを残す原動力となったのは、やはり同族血縁集団である宗族の力が与っていたのではなかろうか。賀恒徳氏の文化園創設にも連綿とした中国人のアイデンティティのあり方を感じさせる。

(注1) ヴェアシュアー教授が所持していたのは、渡部・ダニエルス編著『雲南の生活と技術』(慶友社、1994年)、渡部著『雲南少数民族伝統生産工具図録』(慶友社、1996年)。

(注2) 詳しくは以下の報告書を参照のこと。潘魯生主編『山東農村文化産業調査報告書—手芸農村—』山東人民出版社、済南、2008年刊。